

第4章

座標変換

座標系とは、平面や空間内の点に数の組を対応させる写像のことだった（第1章 1.1 参照）。座標系を定めるには、原点 O と基底 $\{\vec{e}_i\}$ が必要であり、このとり方は無限にあるので、座標系の定め方は一意ではない。ある座標系で座標 (x, y) である点 P は、別の座標系では (x', y') であるとするとき、 (x, y) と (x', y') はどのような関係式を満たすだろうか。これを座標系間の関係（原点の座標、基底の変換行列）を用いて表すことがこの章の目的である。

以下では内容をわかりやすくするために、平面 \mathbb{R}^2 の直交座標系の変換について述べる（空間の場合もまったく同様である）。つまり、平面上の点 O と正規直交基底^{*1} $\{\vec{e}_i\}_{i=1,2}$ によって定まる座標系 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ の変換について考える。

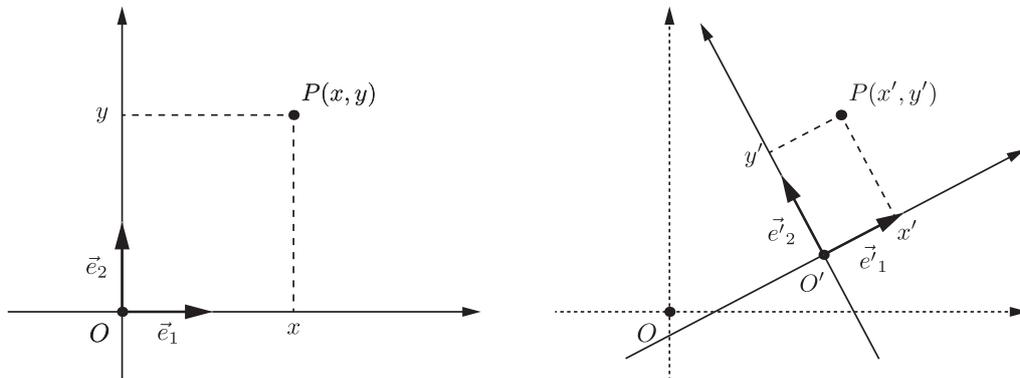


図 4.1 座標系が異なれば、点の座標も異なる

4.1 座標の平行移動

この節では、直交座標系 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ に対し、原点 O を別の点 O' に変えた座標系 $\{O'; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ を与え、この2つの座標系における座標の変換（関係）について考える。

^{*1} $\|\vec{e}_1\| = \|\vec{e}_2\| = 1$, かつ $\langle \vec{e}_1, \vec{e}_2 \rangle = 0$ を満たす平面ベクトルの組のこと。

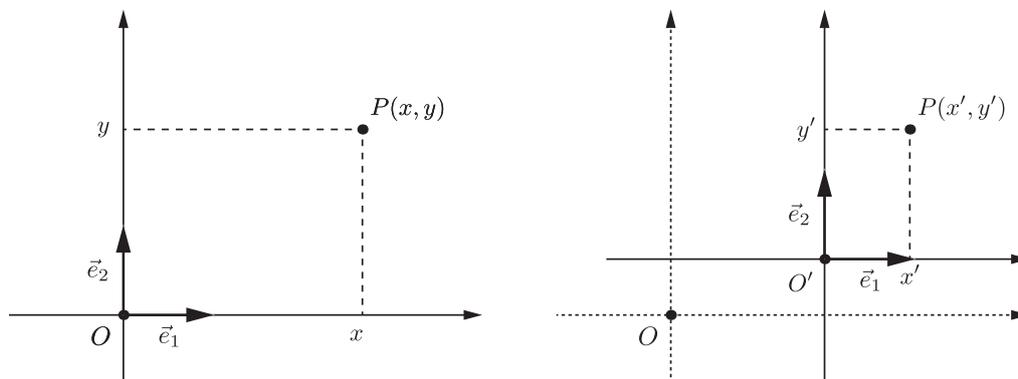


図 4.2 原点のみ移動した座標系

各座標系における点 P の座標をそれぞれ (x, y) , (x', y') とする。つまり,

$$\overrightarrow{OP} = x\vec{e}_1 + y\vec{e}_2, \quad \overrightarrow{O'P} = x'\vec{e}_1 + y'\vec{e}_2.$$

点 O' の $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ における座標を (d_1, d_2) とする。つまり,

$$\overrightarrow{OO'} = d_1\vec{e}_1 + d_2\vec{e}_2.$$

このとき,

$$\begin{aligned} x\vec{e}_1 + y\vec{e}_2 &= \overrightarrow{OP} = \overrightarrow{OO'} + \overrightarrow{O'P} \\ &= (d_1\vec{e}_1 + d_2\vec{e}_2) + (x'\vec{e}_1 + y'\vec{e}_2) \\ &= (x' + d_1)\vec{e}_1 + (y' + d_2)\vec{e}_2. \end{aligned}$$

したがって, $x = x' + d_1$, $y = y' + d_2$ を得る.

座標変換の公式 (原点の移動)

座標系 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ において $P(x, y)$, 座標系 $\{O'; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ において $P(x', y')$ とする。さらに, $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ において $O'(d_1, d_2)$ であるとする。このとき,

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} d_1 \\ d_2 \end{pmatrix}$$

が成り立つ。

例 4.1. 座標系 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ において, 方程式 $y = 2x^2 - x + 1$ で与えられる放物線を C とする。座標系 $\{O'; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ における C の方程式が $y' = ax'^2$ であるとき, 定数 a と点 O' の座標系 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ における座標を求めなさい。

解. 座標系 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ における点 O' の座標を (d_1, d_2) とおくと, 座標の変換公式より,

$$x = x' + d_1, \quad y = y' + d_2$$

となる。これを $y = 2x^2 - x + 1$ に代入すると

$$y' + d_2 = 2(x' + d_1)^2 - (x' + d_1) + 1 \iff y' = 2x'^2 + (4d_1 - 1)x' + (2d_1^2 - d_1 + 1 - d_2)$$

であるから、右辺の x' の係数と定数項が消えるように d_1, d_2 を定めればよい。

しかし、ここでは別の解法を用いる。 C の定義式の右辺を平方完成すると

$$y = 2x^2 - x + 1 = 2\left(x - \frac{1}{4}\right)^2 + \frac{7}{8}$$

であるから、 $x - \frac{1}{4} = x'$, $y - \frac{7}{8} = y'$ とおけば、 C の方程式は $y' = 2x'^2$ となる。上の式と座標変換の公式と比較することにより、 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ における O' の座標が $\left(\frac{1}{4}, \frac{7}{8}\right)$ であることがわかる。

4.2 基底の変換

次に、直交座標系 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ に対し、原点 O は変えずに、基底だけを変えた座標系 $\{O; \vec{e}'_1, \vec{e}'_2\}$ を与え、この2つの座標系における座標の変換（関係）について考える。

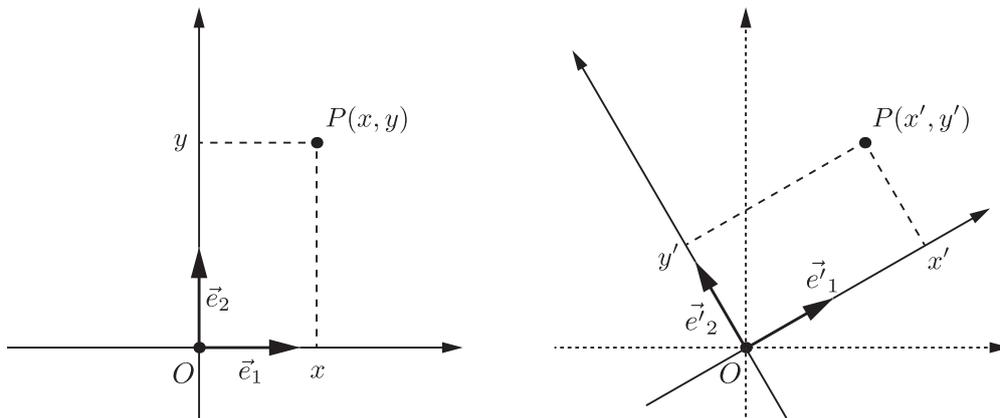


図 4.3 基底を変換した座標系

各座標系における点 P の座標をそれぞれ (x, y) , (x', y') とする。つまり、

$$\overrightarrow{OP} = x\vec{e}_1 + y\vec{e}_2, \quad \overrightarrow{OP} = x'\vec{e}'_1 + y'\vec{e}'_2.$$

ベクトル \vec{e}'_i ($i = 1, 2$) も平面ベクトルなので、 $\{\vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ の線形結合で表すことができる。つまり、

$$\vec{e}'_1 = a_1\vec{e}_1 + b_1\vec{e}_2, \quad \vec{e}'_2 = a_2\vec{e}_1 + b_2\vec{e}_2 \quad (4.1)$$

となる数 a_1, a_2, b_1, b_2 が存在する。このとき、

$$\begin{aligned} x\vec{e}_1 + y\vec{e}_2 = \overrightarrow{OP} &= x'\vec{e}'_1 + y'\vec{e}'_2 \\ &= x'(a_1\vec{e}_1 + b_1\vec{e}_2) + y'(a_2\vec{e}_1 + b_2\vec{e}_2) \\ &= (a_1x' + a_2y')\vec{e}_1 + (b_1x' + b_2y')\vec{e}_2 \end{aligned}$$

となり、 $x = a_1x' + a_2y'$, $y = b_1x' + b_2y'$ を得る。これは行列を用いて

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a_1x' + a_2y' \\ b_1x' + b_2y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a_1 & a_2 \\ b_1 & b_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} \quad (4.2)$$

と表すことができる.

ここで, 4.2式右辺の行列は, 基底のベクトルを成分とする形式的な 1×2 行列の関係式

$$\begin{aligned} (\vec{e}_1 \quad \vec{e}_2) &= (a_1\vec{e}_1 + b_1\vec{e}_2 \quad a_2\vec{e}_1 + b_2\vec{e}_2) \\ &= (\vec{e}'_1 \quad \vec{e}'_2) \begin{pmatrix} a_1 & a_2 \\ b_1 & b_2 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

に現れる行列と同じ行列である. これを基底の変換行列という.

座標変換の公式 (基底の変換)

座標系 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ において $P(x, y)$, 座標系 $\{O; \vec{e}'_1, \vec{e}'_2\}$ において $P(x', y')$ とする. さらに, それぞれの基底 $\{\vec{e}_i\}$ と $\{\vec{e}'_j\}$ は

$$(\vec{e}_1 \quad \vec{e}_2) = (\vec{e}'_1 \quad \vec{e}'_2) M$$

を満たすとする. このとき,

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = M \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix}$$

が成り立つ.

命題 4.2. 直交座標系を与える 2つの基底 $\{\vec{e}_i\}_{i=1, \dots, n}$ と $\{\vec{e}'_j\}_{j=1, \dots, n}$ の間の変換行列は直交行列である. つまり, 基底が

$$\langle \vec{e}_i, \vec{e}_j \rangle = \delta_{ij}, \quad \langle \vec{e}'_i, \vec{e}'_j \rangle = \delta_{ij}$$

を満たすとき,

$$(\vec{e}_1 \quad \vec{e}_2 \quad \cdots \quad \vec{e}_n) = (\vec{e}'_1 \quad \vec{e}'_2 \quad \cdots \quad \vec{e}'_n) M \quad (4.3)$$

となる行列 M は直交行列である.

Proof. $n = 2$ の場合, $M = \begin{pmatrix} a_1 & a_2 \\ b_1 & b_2 \end{pmatrix}$ とおくと, \vec{e}'_j は \vec{e}_i の線形結合 (4.1) と表される. M が直交行列であることと

$$a_1^2 + b_1^2 = a_2^2 + b_2^2 = 1, \quad a_1b_1 + a_2b_2 = 0$$

は同値であるから, これが成り立つことを示せばよい. 条件式 (4.1) より

$$\begin{aligned} 1 &= \|\vec{e}'_1\|^2 = \langle \vec{e}'_1, \vec{e}'_1 \rangle = \langle a_1\vec{e}_1 + b_1\vec{e}_2, a_1\vec{e}_1 + b_1\vec{e}_2 \rangle \\ &= a_1^2\|\vec{e}_1\|^2 + 2a_1b_1\langle \vec{e}_1, \vec{e}_2 \rangle + b_1^2\|\vec{e}_2\|^2 \\ &= a_1^2 + b_1^2 \end{aligned}$$

を得る. 同様に, $\|\vec{e}'_2\|^2 = 1, \langle \vec{e}'_1, \vec{e}'_2 \rangle = 0$ より, $b_1^2 + b_2^2 = 1, a_1b_1 + a_2b_2 = 0$ を得る.

一般の n のときは、ベクトルを成分とする形式的な行列（ベクトル）を考え、この積をベクトルの内積を用いて定義する。例えば、

$$\begin{pmatrix} \vec{a}_1 & \vec{b}_1 \\ \vec{c}_1 & \vec{d}_1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \vec{a}_2 & \vec{b}_2 \\ \vec{c}_2 & \vec{d}_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \langle \vec{a}_1, \vec{a}_2 \rangle + \langle \vec{b}_1, \vec{c}_2 \rangle & \langle \vec{a}_1, \vec{b}_2 \rangle + \langle \vec{b}_1, \vec{d}_2 \rangle \\ \langle \vec{c}_1, \vec{a}_2 \rangle + \langle \vec{d}_1, \vec{c}_2 \rangle & \langle \vec{c}_1, \vec{b}_2 \rangle + \langle \vec{d}_1, \vec{d}_2 \rangle \end{pmatrix}$$

と定める。右辺の行列は数を成分とする通常の行列であることに注意せよ。このとき、

$$\begin{pmatrix} \vec{e}'_1 \\ \vec{e}'_2 \\ \vdots \\ \vec{e}'_n \end{pmatrix} (\vec{e}'_1 \ \vec{e}'_2 \ \cdots \ \vec{e}'_n) = \begin{pmatrix} \langle \vec{e}'_1, \vec{e}'_1 \rangle & \langle \vec{e}'_1, \vec{e}'_2 \rangle & \cdots & \langle \vec{e}'_1, \vec{e}'_n \rangle \\ \langle \vec{e}'_2, \vec{e}'_1 \rangle & \langle \vec{e}'_2, \vec{e}'_2 \rangle & \cdots & \langle \vec{e}'_2, \vec{e}'_n \rangle \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \langle \vec{e}'_n, \vec{e}'_1 \rangle & \langle \vec{e}'_n, \vec{e}'_2 \rangle & \cdots & \langle \vec{e}'_n, \vec{e}'_n \rangle \end{pmatrix} = I_n$$

であるから、(4.3) より

$$\begin{aligned} I_n &= \begin{pmatrix} \vec{e}'_1 \\ \vec{e}'_2 \\ \vdots \\ \vec{e}'_n \end{pmatrix} (\vec{e}'_1 \ \vec{e}'_2 \ \cdots \ \vec{e}'_n) = {}^t M \begin{pmatrix} \vec{e}_1 \\ \vec{e}_2 \\ \vdots \\ \vec{e}_n \end{pmatrix} (\vec{e}_1 \ \vec{e}_2 \ \cdots \ \vec{e}_n) M \\ &= {}^t M I_n M \\ &= {}^t M M \end{aligned}$$

となり、 M が直交行列であることがわかる。 □

問題 4.3. $\{O, \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ を平面の直交座標系とする。次の問に答えなさい。

- (1) 基底のベクトル \vec{e}_1, \vec{e}_2 を反時計回りに $\frac{\pi}{4}$ だけ回転させたベクトルをそれぞれ \vec{e}'_1, \vec{e}'_2 とする (図 4.4 参照)。 \vec{e}'_1, \vec{e}'_2 を \vec{e}_1, \vec{e}_2 の線形結合で表しなさい。
- (2) $\{O, \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ -座標系において方程式 $x^2 - y^2 = 1$ を満たす点 (x, y) の集まりを C とする。 C を $\{O, \vec{e}'_1, \vec{e}'_2\}$ -座標系の方程式で表しなさい。

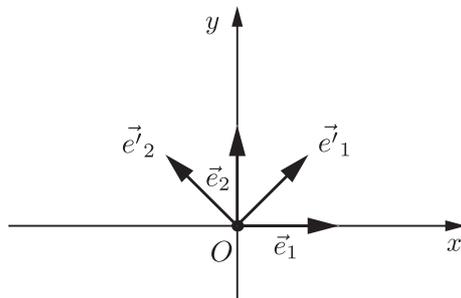


図 4.4 基底を変換した座標系

解. (1) $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ 座標系の単位点をそれぞれ E_1, E_2 とする。すると、 $E_1(1, 0), E_2(0, 1)$ である。 \vec{e}'_1, \vec{e}'_2 に対し、点 E'_1, E'_2 を $\vec{e}'_1 = \overrightarrow{OE'_1}, \vec{e}'_2 = \overrightarrow{OE'_2}$ となるように定める

と、回転変換の定義より, E'_1, E'_2 の $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ 座標系における座標はそれぞれ

$$R_{\frac{\pi}{4}} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{\sqrt{2}}{2} & -\frac{\sqrt{2}}{2} \\ \frac{\sqrt{2}}{2} & \frac{\sqrt{2}}{2} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{\sqrt{2}}{2} \\ \frac{\sqrt{2}}{2} \end{pmatrix},$$

$$R_{\frac{\pi}{4}} \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{\sqrt{2}}{2} & -\frac{\sqrt{2}}{2} \\ \frac{\sqrt{2}}{2} & \frac{\sqrt{2}}{2} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -\frac{\sqrt{2}}{2} \\ \frac{\sqrt{2}}{2} \end{pmatrix}$$

となる. したがって,

$$\vec{e}'_1 = \overrightarrow{OE'_1} = \frac{\sqrt{2}}{2} \vec{e}_1 + \frac{\sqrt{2}}{2} \vec{e}_2,$$

$$\vec{e}'_2 = \overrightarrow{OE'_2} = -\frac{\sqrt{2}}{2} \vec{e}_1 + \frac{\sqrt{2}}{2} \vec{e}_2$$

を得る.

(2) (1) の結果より, $M = \begin{pmatrix} \frac{\sqrt{2}}{2} & -\frac{\sqrt{2}}{2} \\ \frac{\sqrt{2}}{2} & \frac{\sqrt{2}}{2} \end{pmatrix}$ とおくと

$$(\vec{e}_1 \quad \vec{e}_2) = (\vec{e}'_1 \quad \vec{e}'_2) M$$

となるので, $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ 座標系の座標 (x, y) と $\{O; \vec{e}'_1, \vec{e}'_2\}$ 座標系の座標 (X, Y) との関係は

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = M \begin{pmatrix} X \\ Y \end{pmatrix}, \quad \text{つまり} \quad \begin{cases} x = \frac{\sqrt{2}}{2}X - \frac{\sqrt{2}}{2}Y \\ y = \frac{\sqrt{2}}{2}X + \frac{\sqrt{2}}{2}Y \end{cases}$$

となる. これを $x^2 - y^2 = 1$ に代入することにより, $\underline{XY = -\frac{1}{2}}$ を得る.

4.3 一般の座標変換

最後に, 直交座標系 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ に対し, 原点 O と基底 $\{\vec{e}_i\}$ の両方を変えた座標系 $\{O'; \vec{e}'_1, \vec{e}'_2\}$ を考えよう. この2つの座標系における座標の変換公式は, 前節と前々節の座標変換の「合成」として得られる. つまり, 座標系 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ から $\{O'; \vec{e}'_1, \vec{e}'_2\}$ への変換を,

$$\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\} \longrightarrow \{O'; \vec{e}_1, \vec{e}_2\} \longrightarrow \{O'; \vec{e}'_1, \vec{e}'_2\} \quad (4.4)$$

という2つの座標変換に分けて考える. 座標系 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ における点 O' の座標を (d_1, d_2) とし, 基底 $\{\vec{e}_i\}, \{\vec{e}'_j\}$ が

$$(\vec{e}_1 \quad \vec{e}_2) = (\vec{e}'_1 \quad \vec{e}'_2) M$$

の関係を満たすとする. (4.4) の3つの座標系における点 P の座標をそれぞれ (x, y) , (x', y') , (x'', y'') とすると,

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} d_1 \\ d_2 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = M \begin{pmatrix} x'' \\ y'' \end{pmatrix}$$

であるから、 (x, y) と (x'', y'') は

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = M \begin{pmatrix} x'' \\ y'' \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} d_1 \\ d_2 \end{pmatrix}$$

と変換される。

例 4.4. ある座標平面 (座標系は $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$) において方程式 $y = 2x - 3$ で与えられる直線を l とする. この座標系を別の直交座標系 $\{O'; \vec{e}'_1, \vec{e}'_2\}$ に変換したところ, l の方程式は $Y = 0$ となった. このとき, 座標系 $\{O; \vec{e}_1, \vec{e}_2\}$ における点 O' の座標と基底の変換行列を求めなさい.

解. 直線 l の方程式は行列を用いて,

$$\begin{pmatrix} 2 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} - 3 = 0$$

と表すことができる. ここで

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = M \begin{pmatrix} X \\ Y \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} d_1 \\ d_2 \end{pmatrix}$$

と座標変換すると

$$\begin{pmatrix} 2 & -1 \end{pmatrix} \left(M \begin{pmatrix} X \\ Y \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} d_1 \\ d_2 \end{pmatrix} \right) - 3 = 0$$

であるから,

$$\begin{pmatrix} 2 & -1 \end{pmatrix} M \begin{pmatrix} X \\ Y \end{pmatrix} + 2d_1 - d_2 - 3 = 0$$

となる. この方程式が $Y = 0$ となるためには, M と d_1, d_2 が

$$\begin{pmatrix} 2 & -1 \end{pmatrix} M = \begin{pmatrix} 0 & k \end{pmatrix}, \quad (4.5)$$

$$2d_1 - d_2 - 3 = 0 \quad (4.6)$$

を満たせばよい.

(4.6) を満たす d_1, d_2 は無限にある. $d_1 = 1, d_2 = -3$ などがその例である.

$M = \begin{pmatrix} \vec{a} & \vec{b} \end{pmatrix}$ とおくと, M が直交行列であることから,

$$\|\vec{a}\| = \|\vec{b}\| = 1, \quad \langle \vec{a}, \vec{b} \rangle = 0 \quad (4.7)$$

が成り立つ. さらに, $\vec{n} = (2, -1)$ とおくと, 条件 (4.5) は

$$\langle \vec{n}, \vec{a} \rangle = 0, \quad \langle \vec{n}, \vec{b} \rangle = k \quad (4.8)$$

と同値であることから, (4.7), (4.8) より, \vec{n} と \vec{a} は直交し, \vec{n} と \vec{b} は平行であることがわかる. そこで, $\vec{b} = \frac{1}{\|\vec{n}\|} \vec{n}$ とし, \vec{a} を \vec{n} と直交する単位ベクトルとすれば, M は (4.5) を満たす直交行列となる.

